
17発の弾丸

裏陥駒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

17発の弾丸

【Nコード】

N7954B

【作者名】

裏陥駒

【あらすじ】

ある日、高校生＜カワジアラキ川治新騎＞は殺人現場を目撃してしまう

零発目「目撃と逃走」(前書き)

誠に勝手ながら

ブログが歯切れ悪いため修正&amp;追記させていただき
ました

零発目「目撃と逃走」

俺は高校生

勉強に励む一般人

いつものように

高校が終わって

いつものように

帰る準備して

いつものように

家まで自転車で走っていた。

けど違った。

いつもとは…

俺は見てしまった…

通学路が工事中だったので

いつもと違う道を通って帰ることにした。

とある工場跡の前を通ったとき

「…ア…ア…」

工場跡の方から声が聞こえた気がして

俺は自転車を止めた。

普段なら聞き流していただろう。

自転車に跨りながら工場跡を見してみる

空耳かと思い再びペダルを踏もうとした瞬間

「…アア…アアア…」

同じ感じの聲が

さつきより多少大きく声にならない

唸りのような掠れた声で確かに聞こえた。

ただ…ただ何となくか

何かに引きつけられたのか

今となっては分からないが

目の前には工場跡の鉄のフェンスに穴が開いていた。

人一人は通れる

俺は自転車から降り

自転車に鍵をかけ

鞆を持ち

工場跡のフェンスの穴をくぐった。

これが俺の生活を狂わすとは…

今になって穴をくぐった事を悔やまれる。

工場跡と言うのは

汚いものだ。

「グ…アア…アアアア」

まただ

また聞こえた。

どんどん近くなっている。

何が起こってるんだ？

拷問でもされてるんじゃないか
と思うぐらいだ。

声の聞こえる方向に行くと
建物がある

どうも工場跡の倉庫っぽい建物かららしい。

「グアアアアアアア」

間違いない

苦しみに満ちた声は

この建物からだ。

だがドアを開けるのも気が引ける。

建物の側面に窓があったので覗いてみる。

嫌な予感ばかり当たってしまう

そこには烏がゴミを集団で漁るように

スーツを着た男達が

一人の老人の両手を机の上に乗せ

何かを刺している。

鉛筆だ…

男達は鉛筆を老人の手に刺している。

そしてその様子を見ている。

白髪頭のスーツを着た老人

(ひでえ…)

同情しながらも

心底恐怖を覚えた。

スーツの老人は拷問と思われる行為を楽しんでいるようだった。見ては行けないような光景を見てしまった俺は考えた。

（このままバレない内に帰るのが利口だな）

我ながら正当な結論だと思った。

（その後警察呼んで…）

早速実行しようとした

その時だ。

カチャ…

（カチャ？…）

嫌な効果音を聞いてに俺は後ろを向いた。

（嘘…だ…ろ…）

銃だ…

しかも俺の頭部に銃口が…

こんな状況からして本物？

サイレンサーまでついてる…。

「静かにしてください。」

「！！」

危険信号が脳を刺激し

声にならない声で叫ぶ

「静かにしないと撃ちますよ。」

「なな：俺は怪しい者じゃない：！！！！」

更に危険信号が脳を刺激

「貴方何者ですか？」

「通りすがりの者です。」

「通りすがり？随分と変わった道をお歩きですね。」

そう言って銃口を押し付けてくる。

（アツツ！！）

サイレンサーが異常に熱い。

本物だ：しかも前に撃ってる。

「取りあえず、今は任務先決しますので貴方は大人しくしてて貰います。」

そう言って片手に銃を構えながらも片方の手で無線で何やら通信している。

よく見たら、銃の後ろに構えてるのは

俺と歳はそう変わらさそうな少女だった。

（黒髪のロングで可愛い：真面目そう：背も低いし、俺好みだな…）

緊急時に馬鹿なことを考えた。

次の瞬間

ガラスが割れる音がして窓から光が漏れてきた。

「な…！？」

光が直接目に入ったため目が眩んだ

瞬間…

バラバラバラバラ

凄まじい爆音が連続して発せられる。

（じゅ…銃声！）

「な！！？合図はまだ…」

後ろのピストル女（勝手に命名）少し驚いている。

（合図？仲間がいるのか…）

ようやく目が見えてきた。

建物の中を見る。

無数の弾痕が壁に撃ちつけられていた。

するとそこには

拷問されていた老人

拷問していたスーツ男数人

拷問を見て楽しんでいたスーツの老人

全てが

血をまき散らし

投げ捨てられたように倒れていた。

恐らく誰も生きていないだろう。

そう思った瞬間

本能が危険信号を脳に発した。

（ヤバイ…逃げろ逃げろ逃げろ！！）

自分に言い聞かせながら俺はピストル女の腕を叩いた。

無線に気を取られていたらしく

俺の突然の行動に

不意打ちをくらい銃を落とした。

と同時に俺は走り出した。

「あ！待ちなさい！」

（殺される！！）

全速力で走りながら建物の角を曲がった。

瞬間

ガス！！

「…！？」

一瞬何が起こったかわからなかった…

突然吹き飛んだ俺は地面に叩きつけられた。

地面に叩きつけられた俺は

上を見上げる。

するとそこには筋肉質の大男がいた。

男は1メートル程の機関銃を右手に持ち俺を見下していた。

（銃?!）

そう考えた瞬間俺の本能がまた反応した。

（逃げ…）

ドス！

立ち上がろうとしたが踏みつけられた。

「グハァ!…」

「何者かは知らんが呆気ない最後になったな…」
頭の中が真っ白になった。

（呆気ない最後…?!）

サイゴって

俺は死ぬのか…?

死にたくない…

只興味本位で見に来ただけなのに
死にたくない…

シニタクナイ!!

男が銃をこちらに構えようとした瞬間。

俺は胸ポケットからボールペンを取り出し
男の足首に突き刺した。

深々と突き刺さったボールペン：

それは、

生々しい

肉が抉れる感触

筋肉や

骨に擦れる感触

滲み出る血液

男は、足首を刺されたことにより怯んだ。

俺の本能は、それを見逃さなかった。

怯んだと同時に俺は、力の抜けた男の足を払い
渾身の力を込めた拳を男の顔面に叩き込んだ。

「グ…」

男はよろめき、顔を左手で抑える。

さらに、俺は男に向かい体当たりをした。

(…！)

同時に偶然、男の腰にあった物を引き抜く

男は倒れ、俺は最後の力こめ走った。

「待ちなさい！」

走る途中ピストル女の声がしたが無視
自分が、最初工場跡に入ったフェンスの穴は、ピストル女がいる方
向なので行けないため
本能に任せ走った。

ピストル女は、追いかけて来ていない。

（走れ…走れ…）

道路と工場跡の敷地の分かつフェンスが見えてきた。

金網の上は有刺鉄線が張り巡らせていたが
俺は、勢いよく飛びつきフェンスをかけ上がり有刺鉄線も、構わず
通った。

「ハアハア…」

なおも走り続けた。

逃げるために…

俺の、右手には男から奪った拳銃が握りしめられていた。

零発目 「目撃と逃走」 (後書き)

更新は周一を目標にやっています。
今後とも宜しくお願いします。

一 発目「覚悟と失敗」(前書き)

普通に1ヶ月以上放置してました。
そしてさらに短くなっています。
スイマセン

一発目「覚悟と失敗」

「畜生お！。くっそガキがああああ！」

謎の学生が逃げた後の、工場跡地で叫ぶアスト〔大男の仕事名〕。

「静かにして下さい。叫ぶより先にする事があります。」

「うるせええ！あの糞ガキが！ぶち殺してくれる！」

（完璧に冷静さを失っていますね。）

「静かにしないと、頭打ち抜きますよ。」

「ぐぬ…」

「そんなに元気なら、自分で足を治療して下さい。」

「了解…」

（やれやれ一苦労です、自分勝手な仕事仲間を持つと大変ですよ、大体合図を待たずに突撃しますし。）

溜息をつきながら状況を整理。

（遺体がこれだけ多いと、本部に連絡して、死体処理班も呼ばなくては行けませんね。後は…）

「私はあの学生の手掛かりを探します。アストは車に戻り、死体処理班に連絡してください。その後に足の治療です。それは貴方の油断が招いたミスです。」

「了解…」

（逃げられたのは痛いですね。）

捕獲できたら対策が出来たのに：

.....

「つ、つけられてないだろうな：」

家に帰りつき、自室の窓から見渡す。

家は最近出来たばかりの高層マンションの四階である。

「い、いないな」

（つ、疲れた：）

気が動転して、エレベーターを使わず階段を全速力で登ってきてしまった。

「これからどうすっかな」

この時代警察は動いてくれない。

奴らは金のいいなり。

金を積みめば事件をもみ消す。

多分通報した所で金儲けに使えずもみ消す。

テレビであって事件は、被害者や遺族は警察を買収している。

右手に握った黒い硬質の固まり。

どう見てもピストル

（こんな物騒なもん、何で盗ってきたんだ、俺）

とりあえず、その拳銃をパソコンで調べて見た。
「グロック17…？ ジュウナナ？ 何で17？」

この拳銃はグロック17と言うらしい。

「これがセーフティー…マガジン…トリガー」

いろいろ情報が出てくるぞ…

（マニアックだなおい）

コッキングとやらをやってみた。

カチャンと弾丸が飛び出てくる。

全部で17発

それをまたマガジンに入れる。

（撃った時は、薬莢が出てくるわけか）

基本は案外簡単に覚えた。

（こんなん…）

こんなんで人を殺せる。

引き金を引くだけで、さっきの男達のように、簡単に死ぬんだ。
そう思うと実感が湧いてきた。

人殺しの現場を…

何で俺はのんびりしていたんだ。

狙われてるんだ…

あの二人に、

何で、工場跡になんかに入ったんだ。

何で、いつもの通学路が工事中だったんだ。

死にたくない。

死ぬもんか

死ぬもんか！

死ぬもんか！！

死ぬもんか！！！！

コロサレテタマルカ！！！！

グロック17を握りしめる。

「生き延びるぞ…」

俺は覚悟を決めた。

「ああ！！」

そこで俺は思いだした。

工場跡のフェンスの穴を通った時に置いてきた自転車を。

一 発目「覚悟と失敗」(後書き)

次はもっと早く更新します。

今後ともよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7954b/>

17発の弾丸

2010年12月16日02時57分発行